

あとがき

本書は、学園創設者である武田ミキの自叙伝ともいふべき「武田学園創成私記」（以下、「私記」と略称する）をもとに編集したものである。「武田学園創立三十五周年記念誌」（一九八三年刊行）に収められている「私記」の成り立ちについては、当時その整理・編集にあたった横山邦治氏の「前書」と「後書」に詳しい。

それによると、「私記」は昭和四十七年（一九七二）ごろから書き始められ、その後、五十一年、五十四年と断続的に書き継がれたものであるという。いずれも、入院療養中の病床での執筆であった。執筆を始めるきっかけとなったのは、四十七年ごろ学園の内外で起こったさまざまな問題に対処するうちに、心労から体調を崩し福山市の多田病院に長期入院を強いられたことによる。闘病生活はこれまでも何度か経験しているが、今回は古稀を過ぎてからの大患であり、死を間近に感じとりながら、生あるうちに自らの歩みを確かめなかにして遺しておきたい、そうした切実な思いに駆られてのことであった。

「廃物利用の更半紙の裏紙に、鉛筆で走り書きされた」草稿は、病床のこととて、資料も見ずに、ただ「超人的」な記憶力のみ頼って書かれたもので、もとより公表を前提としたものではなく、あくまでも身内の人々だけに見せるために書き遺した手記としての性格を有していた。したがって、「記念誌」への掲載に際しては、著しく私事に涉る部分などを中心に大幅な削除が施され、掲載分は実際に書き溜めたうちの半分程度に過ぎないとのことである。こうした手記を「記念誌」の、しかも冒頭に掲載することの適否については、当時の編集委員会内部でも論議が交わされ

たようであり、そもそも公表の意志のない著者を説き伏せることからして相当の難事であったはずである。しかし今にして思えば、これによつて、我々は人間武田ミキの実像を知る上で又とない資料を目にすることができるようになつたわけであり、この幸運を素直に喜びたいと思う。

本書の編集にあたっては、次のような点に留意した。「私記」は全体で十六章からなる。一、十二章が多田病院で書かれたもの、十三章と十四、十六章はそれぞれ五十一年、五十四年に大槻病院に入院していたときの記述である。本書は、その内の多田病院入院中に書かれた一、十一章までを収録した。両親の顔も知らぬ薄幸の生い立ち、やがて身を投じた教育界での高揚の日々と敗戦による失意、そして戦後の混乱のなかで広島県可部女子専門学校を創立、幾多の困難を乗り越えながら広島文教女子大学の開学という永年の夢を実現する。そこには創設者武田ミキの不屈の人生と、彼女が心血を注いだ武田学園の歩みとが、ほぼ十全に語り尽くされていると判断したからである。

また、読みやすさという点に配慮して、本文中に関係の写真を適宜挿入し、文字表記なども一部改めた。そのほか、文意の通じにくい箇所に関し若干の訂正を行ったが、できるだけ原文を尊重する立場から、原則として文章には手を加えていない。方言交じりの飾り気のない筆致には肉声を聞くような独特の味わいがあり、そうした息遣いの中から著者の人となりが浮かび上がってくるように思われる。

巻末には平成三年度創立記念日の式辞原稿（自筆）を掲載した。学園では、昭和二十三年（一九四八）四月十五日に広島県可部女子専門学校が創立されたのに因んで、この日を創立記念日と定め、式典を催してきた。掲載分は、卒寿を迎えた著者が公式の場で述べた最後の式辞である。式典自体は毎年の行事であるが、著者にとっては一年一年の営為の上に到達した、格別の思いが籠もった一日であった。それは、かなりの長文にも拘らず、自ら筆を執り推敲を重ねた、この原稿からも窺うことができる。一年後には最後の病に臥すとは思えぬ確かな筆勢からは、教育に生き教育

に死する”をモットーに生き抜いた、明治の女性の気概が伝わってくるようである。

次に本書の内容について触れておこう。ミキは明治三十四年（一九〇二）に広島県沼隈郡千年村字常石（現、沼隈町）に生まれた。ミキが終生敬慕して止まなかつた昭和天皇とは同年であり、今年はずいぶん生誕百年の年にあたる。亡くなったのは平成五年（一九九三）であるから、文字どおり二十世紀を教育一筋に生き抜いた女性ということが出来る。十人兄弟の末っ子として生まれたミキは、両親とは生後一年足らずの間に相次いで死別している。実家の家業である廻船業の方も思わしくなく、そうしたなかで両親を失ったのである。親代わりとなって親身の世話をしてくれる兄・姉はいたが、「両親の顔は全然知らぬ」薄幸の少女期であった。

幼くして教師の道を志したミキは、家庭の事情から上級学校への進学も思うにまかせず、したがって「系統だった学校に行つて学問しているわけではなく、ただ教育が好きで教員検定を次々と受け、資格を取つて教壇に立つ」たと述べているように、その努力は凄まじいものがあった。「私記」には、沼隈半島の東南端、阿伏兎岬の先端にある盤台寺（阿伏兎観音）に籠もつて、ひたすら検定試験のための勉強に打ち込んだ一夏のこと的印象深く記されている。

広島県可部女子専門学校が設立されたのは、戦後も間もない昭和二十三年（一九四八）のことであった。当時の日本は連合国側の占領下であり、GHQの主導による民主化政策が次々と実施に移されていたが、一方ではそれが政治抗争の激化を招き、社会に大きな混乱を巻き起こした。こうした混乱の世相に惑わされることのない、確固たる女性の育成を目指す。ミキの学園創立に賭ける思いは、まさしくこの一点にあった。のちに学園訓の基となる、そのときの一文を掲げておこう。

新生日本の根幹となる真実に徹した堅実なる女性、すなわち社会環境の欠陥や忌まわしい社会風潮に惑わされることなく、如何なる苦難にも挫けることなく、強く正しく明るく生き抜く力を養うとともに、世界に誇る日本女

性の美徳の高揚に努め、社会の浄化に尽くすことの出来る女性の育成を目指して発足したのである。

一見すると、戦前型の古い教育観の再生とみられなくもない。しかし、「軍国主義」から「民主主義」へと激しく転回を遂げる日本社会に身を置きながら、時代に阿ることなく、自らの信念を押し通そうとする態度は、むしろ爽快である。そうした「本物」のみがもつ力によって、その後の風雪にも耐えていくことができたのである。

可部女子専門学校は、学園創立から七年目にしてようやく念願の可部の地に返ることができた。そして十年目には広島県可部女子高等学校が開校する。ここに後の学園の確かな礎が築かれることになる。「自分は今から考えると、あのころ（注、一九五四〜五六）がとても懐かしい。小さな夢に希望と喜びを抱いていたところが、一番幸せであったのだ。」と述べるミキには、学園創立のころに見られた気負いが無い。永年の病臥から解放された喜びもあるだろう。それ以上にこれまで行ってきた教育に対する揺るぎない自信に裏打ちされた気持ちのゆとり、それがこの時期の落ち着きのある文章によく表れている。そこでミキは、自らの教育について次のように語っている。

要は心を育てる教育（人づくり）、知識技能の断片的な教育でなく教育が生活に結びつく教育、女性の性能の伸長教育によって、実力ある、役に立つ、間に合う人間の育成に力を入れているのである。

本学が教育指針としている「心を育てる教育」、その言葉がここに初めて登場してくるのも偶然ではないだろう。

ほかにも、この短い文章の中にはミキ教育の原点を示すいくつかのキーワードが見える。その一つが、「女性の性能の伸長教育」である。女子教育の要諦として戦前から一貫して説き続けてきたもので、その意味するところは、女性に与えられた天賦の才能を伸ばし育てることによって、自立の精神と職業を身に付け、男性に依存しない生き方を目指すことにある。それを一言でいえば、「実力ある、役に立つ、間に合う人間の育成」ということになる。女子教育に対する強烈な自負心、実践を重んじる教育理念が伝わってくる。

しかし、ここで忘れてならないのは、その前提として「知識技能の断片的な教育でなく教育が生活に結びつく（人づくり）教育」が挙げられている点である。広島県可部女子専門学校を創設したときも、和裁や洋裁といった技艺の習得のみに力を入れるのではなく、「人づくり」を教育の根幹に置き、あえて一般教養科目の充実に意を用いたのである。こうした考えは、教員生活を始めた当初からすでに芽生えていたようである。安佐郡久地村立実業補習学校に赴任したミキは、当時の女子部の授業の大半が裁縫科で占められ、本来の教育目的である全人教育の場としては不十分であることを痛感し、視察に訪れた郡役所の責任者に進言して、その改善に奔走したことを少し誇らしげに記している。ちょうど二十歳のころのエピソードである。本学園が、戦後、次々に生まれた洋裁学校などとは道を異にし、高等学校、短期大学、大学、大学院を擁する総合学園へと発展していった秘密は、まさしくここにある。

学園創設から半世紀余、広島文教女子大学の開学から数えて今年で三十五年になる。戦後高等教育が未曾有の変革期を迎えるなかで、女子大学は自らの存立の意味を問われようとしている。二十一世紀社会に即応した、魅力ある大先輩の提示に向けて、さまざまな「改革」が試みられる所以である。しかし、現状を切り開いていく妙手など、そう簡単に見出しうるはずもない。大学の未来を展望する際にまず必要なことは、学園の歴史を正しく認識することであろう。創設者武田ミキの生涯から何を学ぶか、今ほどそれが求められているときはあるまい。

二〇〇一年三月